

平成30年度(2018年度)  
京都市立芸術大学大学院音楽研究科入学試験問題  
西洋音楽史

I. 次のA群の各項にもっとも適切と思われるものをB群から選び、その記号を書きなさい。

A群：

- 1) 18世紀半ばにヨハン・シュターミッツが管弦楽団を率いて、ヨーロッパ中に名声を轟かせた活動の中心地。
- 2) 《広島の犠牲への哀歌》を作曲したポーランドの作曲家。
- 3) 語りと歌の中間に位置するような、言葉の抑揚を生かした唱法で、とくにシェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》で使用されたことで知られている。
- 4) 中世の器楽曲の形式で、いくつかの部分が開と閉の終止で繰り返される。
- 5) 16-17世紀ドイツのオルガニスト・作曲家で、当時の楽器についての記述を含む3巻からなる著作『音楽大全』を出版した。
- 6) ボヘミア生まれの作曲家・ピアニストで、そのピアノ・ソナタはベートーヴェンにも大きな影響を与えたと言われる。
- 7) ブラームスの交響曲第4番第4楽章に用いられた楽曲形式。
- 8) ソナタという種目をはじめて鍵盤楽器に移し、通称《聖書ソナタ》を作曲した。
- 9) ミサ通常文のすべての章を4声のポリフォニーとして通作した《ノートルダム・ミサ曲》の作者。
- 10) フリードリッヒ大王の宮廷音楽家を務めたフルート奏者で、『フルート奏法試論』を著した。

B群：

- |                          |                                |
|--------------------------|--------------------------------|
| a) Johann Kuhnau         | k) Heinrich Scheidemann        |
| b) rondo                 | l) Krzysztof Penderecki        |
| c) Guillaumue Dufay      | m) Mannheim                    |
| d) Sprechstimme          | n) Michael Praetorius          |
| e) Domenico Scarlatti    | o) Johann Baptist Wendling     |
| f) Wien                  | p) Jan Ladislav Dušek (Dussek) |
| g) Witold Lutoslawski    | q) Guillaume de Machaut        |
| h) portamento            | r) Athanasius Kircher          |
| i) estampie              | s) cantiga                     |
| j) Johann Joachim Quantz | t) passacaglia                 |

II. 次にあげた項目から4つを選択し、簡単に説明しなさい。解答用紙の( )内に選んだ項目の番号を記すこと。

1. オペラ・セリア
2. ライトモチーフ (示導動機)
3. トリオ・ソナタ
4. リトルネロ形式
5. パロディ・ミサ (模倣ミサ)
6. トーン・クラスター
7. ミンネジンガー

Ⅲ. 以下に挙げる作曲家について、主要な作品名も挙げながら、作曲様式の特徴、および西洋音楽史上の意義について述べなさい。

1. イゴール・ストラヴィンスキー (Igor Stravinsky)
2. ヨハネス・オケゲム (Johannes Ockeghem)
3. フランツ・リスト (Franz Liszt)
4. クラウディオ・モンテヴェルディ (Claudio Monteverdi)
5. クリストフ・ヴィリバルト・グルック (Christoph Willibald Gluck)

平成30年度(2018年度)

京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程共通試験問題

## 日本音楽史

(1) 次の文の(ア)から(ト)にあてはまる語を次頁の語群から選んで答えなさい。

- ① 現在の日本音楽は、声楽と器楽に分けると、声楽が優位といえる。吉川英史は、日本の声楽を大きく、歌い物(歌曲的なもの)と語り物(語りことば的なもの)に分類した。歌い物には、たとえば、雅楽に含まれる(ア)など、三味線音楽の(イ)や(ウ)などがある。また語り物には、そのルーツともいえる声明の曲種(エ)を初めとして、中世の琵琶伴奏の語り物(オ)や仮面舞踊劇ともいえる能の声楽(カ)、近世に三味線伴奏と人形劇と結合した浄瑠璃の一種である(キ)などがその代表的ジャンルである。
- ② 外来舞楽が伝来する前からすでにあった日本固有の歌舞は、神道の神社や宮廷その他で発達してきた。これらは、神道系歌舞(近代以降には国風歌舞・上代歌舞ともいわれる)というが、外来音楽の影響をうけて、形が整えられた。それらの種類としては、(ク)や(ケ)などがある。外来楽器の(コ)が「誄歌(るいか)」以外のすべてのジャンルで用いられるのに対して、打ちものは(サ)をすべてのジャンルで用いることにその折衷様式が見て取れる。
- ③ 大正時代以降、日本の伝統音楽に洋楽を取り入れた音楽活動が現れた。1920年代の(シ)という名称は、生田流箏曲家の(ス)が中心となって作品発表会を開催したおり、琴古流尺八家の(セ)がその演奏会を名付けたことに由来する。(ス)は、(ソ)などの新しい楽器を創案したことでも有名である。
- ④ 日本の音楽には、同じ長さの時間単位である「拍」がないリズムがある。音楽学者の小泉文夫は、この拍のないリズムを(タ)リズムと呼んだ。たとえば雅楽の(チ)など楽曲の序の部分、能の(ツ)部分、尺八の(テ)、民謡の(ト)などがこのリズム様式にあたる。

【語群】

山田検校、龍笛、等拍、左舞、吉田晴風、催馬楽、古典本曲、長唄、東遊、拍子不合、平家（平曲）、久米歌、箏箏、大太鼓、義太夫節、音取、現代邦楽、笏拍子、宮城道雄、十七弦、江差追分節、地歌、謡曲、自由、八木節、新日本音楽、梵唄、中尾都山、河東節、オークラウロ、講式、

(2) 次の語句のなかから、4つを選び、その内容・概念を説明しなさい。

「箏組歌《菜菔》」、《勸進帳》、《越殿楽》、「手事物」、「黒御簾音楽」、《六段の調》、《仮名手本忠臣蔵》、「一節切」、「邦楽調査掛」、「小泉文夫のテトラコルド理論」